

報告書番号 AS00124 『イエル村の竜種資源<sup>アルマナ</sup>乱獲疑惑、及び周辺地域における竜種の生態調査に関する報告』

本調査における最大の焦点であるイエル村に掛かった疑惑に関して、まず結論から述べる。

イエル村の一部、あるいは全体で竜種資源<sup>アルマナ</sup>を乱獲を行った実績はなく、予想された組織ぐるみでの情報隠蔽、若しくはそれに類する行方も行われた形跡は認められない。

また村人が個々人においては討伐を可能とする具体的戦力は存在せず、外部の人間を統率する力量、ひいては報奨を捻出する財源不足を鑑みた場合、疑惑が上がった5頭以上の小型竜の狩猟、1頭以上の中型竜の討伐を実現する可能性は限りなく低い。

事の発端となった村長マディンⅡギブリ氏の竜種資源<sup>アルマナ</sup>の大量売買に関しては、村に古来より伝わる宝物をマディンⅡギブリ氏の独断で売買に掛けたことが判明。

遺産の売却に関してはクラムナート国法令第27条3項が適用されるが、刑罰の対象と成り得るのは権利取得者側の取得申請、納税義務違反の為、同氏の問責事項は存在しない。

調査概要は上述の通りであるが、下記に調査の時系列を含む詳細を記す。

「はあ、やっと着きました……ここって本当にイエル村でいいんですよね……？もう迷うの嫌ですよお??」

とことん情けない声に溜め息を交え、のつぽの男が独り呟いた。

頭から背中までをすっぽりと覆う巨大なリュックサックを背負っているせいで、後ろからは良く見えないが、手にした杖を付く姿は、一見すると登山家だった。

じりじりと照り付ける初夏の日差しを片手で作った笠で遮り、ぞんざいに立てられた表札を視線でなぞった。

「イ、エ、エ、ル……間違いなさそうですね。いや、思ったより綺麗な所で良かった。宿はありますよね？もうロバや鶏と一緒に寝るのは勘弁して欲しいです。トホホ……」  
完全に独り言だった。男に同行者はいないのだが、誰かに見られたら気の毒な人だと勘違いされそうな程、隣人に訴えかける語り口だった。

ひよろりと背の高い男の名をアランⅡエクスプローラといった。季節は夏だというのに、ボロボロの外套を纏っており、その日差しを避けた格好は旅慣れた青年、といった風情だ

った。

もう何ヶ月も散髪など行っていないであろう伸びっぱなしにした銀髪を後ろで一つに纏めていたのだが、髪ほうきの量が多すぎて箒ほうきの如く散らばっていた。断片的に見れば、浪漫を追い続けて止まない芸術家といった感があるのだが、白哲はくせきの表情と端正な顔立ちをしており、鼻の付け根に乗った小さめな銀縁眼鏡をクイツと持ち上げる仕草などは、学者のようにも見えた。

イエル村は草原の中にぼつんと、作られた村だった。周囲をなだらかな丘に囲われ、その奥には標高の高い山脈が連なっていた。その連峰に降った雨や雪が溶け出して作ったであろう川の支流が村のすぐ傍を通っており、水車がゆつくりと回っていた。

その回転に運ばれるように初夏の風が心地良く通り過ぎていく。都市に住む人間が想像する“豊かな自然のある暮らし”をそのまま絵に描いたような村だった。

ただ、空想と現実の差異は、自然が豊かなだけであって暮らしが豊かな訳ではない所であつて、良く言われるのは、

『家畜はいても人がおらず、自然があつても金がない』

自然があれば自然と共存するのが当たり前で、特色ある産業が発展せず、過去から未来に至るまで変わらぬ暮らしをしているのが宿命であつた。

そして『現状維持は衰退の始まり』とは良くいったもので、大抵の集落は緩やかな滅びの道を進んでいる真つ最中なのだが、そういった意味ではこのイエル村は例外的であつた。

傾いた表札が目にと止まったものの、村の中へ続く一本道をアランがとぼとぼと進んでいても、点在する民家に廃墟が見当たらなかった。それどころか、建物の多くは元からある木材とは違った色合いが継ぎ足されており、補修されて真新しいことが伺えた。

アランは歩きながら村の様子をキョロキョロと観察するのだが、その足取りは右へ左へふらふらとするものだから、さながら千鳥足の酔っ払いだ。

すると、視界の先にブリキで出来たバケツのようなものを抱えた村人の後ろ姿を見つけた。第一村人発見である。

両者とも歩調はゆつたりとしているのだが、長身のアランの方が歩幅が広い為、背後から追いつく形で話しかけていた。

「こんにちわ。ちよおろつとお伺いしたいのですが、お時間よろしいですかあ？」

酔っ払いでなければ、かなり頭の弱そうな大人の口調だった。

村人は振り返ったが、視線を上げず、また答えようとはしなかった。両者には身長差がかなりあつて、アランからは藍色の布でぐるぐる巻きに覆ったターバンのような頭しか見えていなかった。村人は視線を上げず正面を向いているので、視線も合っていないのだが、アランは気にも止めず、

「やあ少年ヘイボーイ！この辺りに宿はありませんか？ もしくは長旅で疲れている人を優しく迎えてくれる心の広い方でも一向に構わないのですが、どちらか心当たらないで

すかね？」

馬鹿みたいな質問の仕方をした。その時、腹部にドンツという重い衝撃が走った。予想だにできなかった襲撃に、アランは大きな背を丸めて悶絶する。

「い、……いきなり何、するんですか……」

膝を付いたアランが、今度はその村人を見上げる格好となっていた。鋭い初夏の日差しを逆光に、ぐるぐる巻きにしたターバンの下から、射光よりも強烈な、火勢を連想させる瞳が覗いていた。

「誰が少年だ？」

少年と思い込んで語りかけた相手は、世にも珍しい燃えるような緋色の瞳をした少女だった。だが、大きな瞳を釣り上げ睥睨する姿は、少年少女というより野生の獣といった風情だ。

言われてみれば確かに少女だった。髪は完全に隠れているものの、小さな顔や、全体的に柔らかなラインの顔は女の子以外の何ものでもない。

しかしながら、いかんせん格好が紛らわしかった。白いシャツに麻色のベスト、カーキ色のズボンとまるで少年の出で立ちだ。せめて髪型が見えていればまた違ったのだろうが、後ろから眺めただけでは勘違いの一つがあっても不思議ではない。

「こ、これは大変失礼しました……」

アランは膝に付いた砂を払いながら、よろよると立ち上がった。背筋を伸ばして少女と対面すると、二人の身長さは30cm以上あり、どう頑張っても少女は見上げざるを得なかった。その事が余程腹に据えかねたのか、忌々しげに睨み付けた。

更なる危険の気配を感じ取ったアランは、素早く腰をおって視線を落とし、頭を掻いて申開きの姿勢を取った。小動物的な、驚くべき速度であった。

「この程度で……情けない奴」

吐き捨てるように少女は誇る。

「はあ……どうも申し訳ありません」

対して、アランは『何に對して謝罪するのか分からないけど取り敢えず謝っておくか』的な雰囲気を開いたが、少女が再度拳を握る様を見るなり、

「ぼ、暴力反対！親御さん村長さんはもちろん、関係各所から女王様まで断固抗議しますよ！？」

最低な徹底不戦を唱えながら、後ずさって逃げた。今度はアランの方が一歩早かった。少女はふん、と一つ鼻を鳴らすと、踵を返し大股で歩き出した。ずんずんと先に進むと、次第に表情が険しくなり、遂に爆発する。

「アンタ、何で付いて来るのよ!？」

「いや〜たまたま方向が一緒なだけですよ？ 付い来ないで！なんて、ちよつと自意識過剰なんじゃ——」

性懲りも無く調子を戻し、意気揚々と発した台詞だったが、最後の方は尻窄みとなって消え、締めは“ごめんなさいと”の一言で結んでいた。

「もう貴女しか頼れる人がいないんです！どうか私に宿をプリーズ！ ノーモア野宿！」少女には意味が分らない異国の言葉を交え、アランは涙目で訴えた。大の大人が、大男といつて差し支えない男が、片膝着いて祈っていた。

少女は演技じみた語りに苛立ちを覚えたが、すぐにそれを通り越した。呆れていた。相手にするのも馬鹿らしいといった感だった。じつとアランの様子を眺めて思案するが、やはり小さく悪態をついて、先に進んでいってしまう。

しかし、数歩先に進んだところで、突然振り返り、

「いつまでそうしてんのさ。宿探してるんでしょ？」

と少女が、心底面倒そうに言った。

花が咲いた、とはこういう事を言うのだろうか。しょぼくれた表情のアランが、輝かんばかりの光を放っていた。

「いや〜ほんと、『捨てる神あれば拾う神あり』ですねぇ。あ、申し遅れました。私、アランⅡエクスプローラと申します」

地形に合わせ曲がりくねった小道を二人並んで歩いている最中、アランは殴られたことなど忘れてしまったような調子で簡単な自己紹介を済ませた。紹介して貰えるお礼と称して、半ば強引に少女の手から、ブリキのバケツを奪い取った直後のことだった。

「エクスプローラ？変な姓ね…あたしはリデルよ」

「私のことは“アラン”、と呼び捨てにして頂いて結構です。エクスプローラなんて呼びにくいったらありやしないですからね。多少、年は離れているかと思いますが、小さなことは気にしませんよ」

ふふん、と今度はアランが小さく鼻を鳴らした。器の大きさを示そうとしたのだが、少女にとっては偉そうに主張する程のことでもなかった。どうやら不当な暴力を水に流す度量は、彼女にとって物の数ではないらしい。

「多少って…：2、3歳でしょ？あたしはこれでも17よ」

「私、これでも今年32なんです。見えませんか？ 私ってどう見ても30超えているでしょ？ねぇ？」

主張を重ねたアランの背中を“嘘つき”と、リデルは思いつ切り叩いた。またも不意打ちをくらひ、手にしたバケツの中身をひっくり返しそうになった。衝撃を肺に受けて咽むせるアランだったが、何故かその一言に若干、傷ついた様子で苦笑いを浮かべた。

「で、何でもまたこんな寂れた村に？ …：格好からして、旅の途中ってどこ？ この街を通るってことは、北に抜けてへ行くの？」

「いえいえ、こんな格好をしているせいか良く山越えの商人と間違えられるのですが、これでも公務の真っ最中として、この村と、あの山に野暮用があるんです」

アランの指差した方角には、連なった山脈の中でも最も標高の高い一角があった。

その時、見え隠れしていた少女の好奇心が急に引込み、警戒心が顔を覗かせた。

この少女、先程の先制パンチといい、どうやら腹芸の出来る性格ではないようだ。歩みこそ止めなかったが、厄介な“余所者”の分類に投げ込まれたであろうことは肌で感じら

れた。

当のアランも、さもありませんと言った感じだった。大した金額の徴税が期待出来るでもない集落に公人が訪れるなど、賄賂の要求かや犯罪の片棒を担がせるような、きつとろくでもない要件に決まっているからだ。

すると、押し黙る少女に代わり、気配を察したアランが捕捉説明を切り出した。

「まあ、私は囑託されただけなので、お国の人間ではないんですけどお………所詮、囑託なんですよね……」

自虐的に呟くと、沸々と湧き上がる鬱憤をぶちまけた。

「仮にも公務だっていうのに全つ然、経費で落とせないんです！それ、に、ですよ？期限には『超』が付くほど厳しいし、人の事をすぐ罵倒するし、その割に報酬は雀の涙みたいなもんだし、あく何かノツてきた！もう言っちゃおうかなく、ええ言っちゃいますとも！決して大きな声では言えませんが——」

アランは口に手を当て、小声でこつそりと告げた。

「———こう見えても私、スリー・イーライセンスの資格を持っているんです。だから本当はやりた  
い放題なんですけど、すつごく我慢してるんです」

聞いたこともない資格の名に、少女は胡乱げな表情を浮かべた。よくよく見れば、青年然とした外見や恰好、言動なんかも怪しき満載であることに、今更気づいたとでも言い  
たげだった。当の本人は自慢気に語るその胡散臭い資格も、ライセンス十中八九騙されているのだ  
と、少女は心の中で呟いていた。

「……ここよ。この村で唯一の宿」

“レストアンドリラクゼーション憩いと食事の宿”——リデルが指さした看板には、実に単純な名前が彫られていた。

ここに至るまでに目にした民家より、二回りは大きな二階建ての建物だった。一階は食  
事処を兼ねているらしく、中に入ると、カウンターの奥に店の主人らしき壮年男性と、幾  
人かの村人らしき客が隅っこの方に座っていた。

「ああ、助かりました。今とてもお腹が空いていて、背中とくつついちゃうんじゃないかと心配していたところだったんですよ」

軽口を飛ばしながら入ると、全員が視線を向けて来た。リデルが最初に向けたのと同じ、  
“余所者”を見る目だった。特に気にした様子もなかったアランだが、ふと違和感を感じ、  
視線の先を追った。

違和感の正体——店の面々は、アランと少女を同じ目で見ていた。

小さな村は排他的になりがちだが、この規模の村なら同郷の人間は親戚みたいなものだ  
ろう。上下関係や隔たりがあるのだとしたら、そこには、それなりの理由があるものだ。

リデルがブリキのバケツ一杯に詰められた中身へ多種類の山菜を手渡している時でさ  
え、店の主人はニコリともせず、額の皺が不機嫌そうな印象を強くしていた。

アランは余計な詮索はせず、背負った巨大なリュックサックを無造作に下ろした。

ズドンツと、見た目を遥かに超える重さを感じさせる音が響いた。リュックサックの重  
心がずれる度、床の軋む音が何かの悲鳴のように聞こえてくる。



山菜と川魚の煮込み、小鹿の炙り肉の香草巻き、三種の炒り豆の特別ソース付き等、一見ただけで空腹になりそうなものや、南瓜の皮を器にして果肉をスープにして戻したもののなど、片田舎の料理店とは思えない程創意工夫アレレンジされた料理だった。聞けば、もっと大きな街で料理人をしていただいたのだという。

アランが恐る恐る、眼前の料理をつまむと、一品に付きライ麦パンが一つ食べれそうな位豊かな味わいの逸品であった。唯でさえ美味しいのだが、腹と背中が付きそうな状態のアランにしてみれば、この光景はまさに絶景であろう。

料理は料理で予想外の味わいだったが、食べる方は食べる方で予想外の化物であった。並べられた数々の料理が、片っ端からアランの腹の中へ収まった。一体、その細い身体はどこに入る収まる場所があるのか——周囲の人間も固唾を飲んで見守ってしまう勢いで消えて無くなった。途中、何度も“おかわり！”や、“旨い！”等が一言、二言あるのだが、その時以外は黙々と口に運び、粛々と噛み砕いて、化物じみた胃袋へ飲み込まれていった。

優に四人前を食し、ようやく落ち着きを取り戻していた。最後に出された珈琲コーヒーもまた格別で、並々ならぬ主人の拘りを感じさせた。

「あく食べた食べた。もう暫く食べれません」

「お前さん、良い食べっぷりだな。作り手としてはこれ以上ない評価だ」

並んだ皿の上には、殆ど物が残っていないなかった。魚の骨の隙間にあるような僅かな肉でさえ綺麗サツパリと無くなっている。まさしく料理人冥利に尽きるというものだろう。店の主人の口元にはうっすらと綻びを見せ、若干の親しみを滲ませた。

「いえいえ、これもマスターの腕があつてのことですよ。私、感服致しました」

普通の人間なら、これだけ食べるだけでも大変な労力があるだろうし、食後には動けなくなりそうなものだが、アランはさっと席を立ち、思い出したように質問をした。

「そういえば、ここは宿だつてリデルさんからお聞きしていたのですが、今晚は宿泊出来ますか？」

店主は無言のうちに首肯した。続く、“アランIIエクスプローラで予約を”という依頼にも同じように返事をした。ちよつとしたやり取りだったが、店主が不機嫌なのではなく、ただ無愛想なだけなのだと分かると、アランは遠慮無く質問を重ねた。

「後、村長さんご挨拶したいのですが、ご自宅はどちらかご存知ですか？」

「店を出て右に少し進むと分かれ道がある。そこを左手に曲がって四軒目だ。家の前に大きな櫛けしきが目印になるだろう」

アランは頷き、礼を述べた。そしてカウンターに背を向けた時、店主が渋味のある声で、「飯代は宿泊とは別料金だから、今精算して行って貰おう」

と告げた。それは極わめて常識的な対応だったが、アランはビクリと身体を竦すくめて振り返った。“今じゃなきや駄目ですか？”と目で問いかけると、店主は“今払え”とこれまた目で答える。

「……………ちなみにお幾らですか？」

明細が積み上げられた伝票を上から下まで眺め、最終行にある小計金額に目が止まると、アランの身体もピタリと固まった。そしてコートの外に付いたポケットをまさぐり、次いで内ポケットを確かめ、ようやく取り出した財布の中身を眺め、カウンターの上にざっと流した。

チャリンと、軽めの金属がぶつかる音がした。しかし、それだけだった。アランが財布を逆さにしてぶんぶん振るが、空っぽになった財布からは銅貨一枚も落ちてはこなかった。その気配を察した幾人かの客がカウンターの方を凝視し始めていた。アランは周囲の視線に晒されると、慌てて巨大なリュックサックの口を開き、中を漁りだした。

「……き、金貨を詰めた小袋はどこだったかな〜」

突き刺さる視線を逸らそうと法螺シヨクを吹いたが、上擦った声では、聞かされる方も笑えなかった。渦中のアランは調子外れ口笛を吹こうとしたが唇が渴いて上手くいかず、掠れた音が虚しく響くばかりだ。

だが、リュックサックの中に確かな手応えを感じた瞬間、アランの董色の瞳が、かつ、と見開いた。そして、皆に知らしめようと頭上に掲げた――

――銅製の鍋を。

「はっ！ 違う、これは唯の鍋……カミールで貰い受けた純銀の鍋は何処へ??」

そのふざけた台詞を聞いた店主が、岩のような顔をしかめ、その顔よりも更に岩石に近い拳をポキリと鳴らした。アランはこれまでにない生命の危機を感じ取り、決死の想いで荷物の発掘作業を再開した。

リュックサックは、街でより縦にも横にも大きく、おまけに奥行きも深い個別作成ワンオフである。綺麗に詰めれば秘境探検でも出来そうな容積を誇るであろうが、幾ら何でもおかしかった。

アランが引つ張り出す生活用品の数々だが、どこにそんな荷が入っているか疑わしくなる量だった。さながら湧泉の如く、あるいは奇術よろしく延々と掘り出しては床の木目を消していった。どう考えても道具が容積を上回り出し、周囲の面々が呆気にとられた時だった。

「おお、あつたあつた、ありました！ ……どうです、これなら問題ないでしょ？」

アランが突き出して見せたのは、古びた一枚の硬貨だった。くすんだ白銀の光を放つ貨幣の表面には象形文字でびっしりと何かが刻まれており、反対の面には女性の顔らしき像が描かれていた。

店主は目を鋭く細め、料理人にあるまじき迫力で上背があるアランを睨めつけた。

興味なり見識なりのある者が見れば、惹かれるものがあつたのかも知れないが、大抵の人間はその国で使われている通貨意外に興味を持たない。店主も例外ではなかった。

「こ、これでどうですか？ 実はこれって非常に稀少価値の高い骨董品です！」

「お前さん、まさか無銭飲食ただめなんじゃ……」

「まままま、まさか！ 私、こう見えても国家公務員なんですよ!？」

ボソリと“囑託ですが”、と付け加えた辺りで、店主の岩のようにゴツゴツしたアラン

の肩に置かれた瞬間、アランが力の限り叫んだ。

「リデルさんにお金を預けっぱなしだったあああああ！！」

嘘か真か問われれば、十人中九人は“嘘だ”と断言しそうな絶叫だった。だが、店主は振り上げようとした拳を下ろし、アランの手にした硬貨を奪い取った。

「……コイツと荷は担保にしておいてやる。さっさと行って来い」

アランはぶんぶん首を縦に振ると、逃げるように店外へ駆け出していった。その姿はさながら無銭飲食者——というか無銭飲食者以外の何者でもなかったのだが、アランは出し抜きに振り返り、

「荷物は危険物が沢山入ってますから、絶対対触らないで下さいね！」

あっけらかんとした調子で返信した。このアラン＝エキスプローラという男、“めげる”とか“しょげる”といった言葉にはめっぽう縁がないらしい。

人の出入りが少ない片田舎では、食い逃げ犯に遭遇するなんて一生に一度あるかないかだろう。啞然とした客の一人が、不安気に店主を見つめた。

「食べ方ってのは性格が出るもんだがな……戻って来なかったらそれまでの男だったということだ」

店主はカウンターに並ぶ綺麗サツパリになった皿を眺めながら、そう呟いた。